

Glocal Tenri



1

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.21 No.1 January 2020

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

CONTENTS

- ・ 巻頭言
“聞く”技術
／堀内みどり..... 1
- ・ 日系移民の歴史にみる天理教の北米伝道の様相 (35)
ニューヨークの日系人と天理教伝道⑥
／尾上貞行..... 2
- ・ 「おさしづ」語句の探求 (38)
「おさしづ」第5巻における刻限と「道」
／澤井治郎..... 3
- ・ 日本語教育と海外伝道 (18)
日本語教育でのコンピューター利用について①
／大内泰夫..... 4
- ・ キルケゴールで読み解く 21 世紀 (16)
誰もが単独者なのは誰もが同じ人類の一員だから
／金子 昭..... 5
- ・ ライシテと天理教のフランス布教 (20)
ライシテと医療⑤
／藤原理人..... 6
- ・ 遺跡からのメッセージ (53)
弥生時代を再考する②昔も今も最先端、種子島広田遺跡
／桑原久男..... 7
- ・ コンゴ社会から見るアフリカ・ヨーロッパ関係試論 (30)
アルフォンス・マサンバ＝デバ大統領
／森 洋明..... 8
- ・ 思案・試案・私案
天大生のSDGsに関する意識調査④
／佐藤孝則..... 9
- ・ 思案・試案・私案
「碑」の字表記問題再考 (4)
／八木三郎..... 10
- ・ 2019 年度公開教学講座要旨：『逸話篇』に学ぶ (5)
第6講：73「大護摩」
／堀内みどり..... 11
- おやさと研究所ニュース..... 12
2019 (令和元) 年度「教学と現代」の案内
／2020 年度公開教学講座の案内／

巻頭言

“聞く”技術

おやさと研究所主任 堀内みどり Midori Horiuchi

2019 年は世界中が大規模災害に見舞われました。日本では大型台風や豪雨などが甚大な被害をもたらし、アメリカやオーストラリアでも広範囲で火災が発生。多くの森が消失し、森の動物そして人間は住処を失いました。アマゾンの森林は火災だけではなく、開発によって、その規模が小さくなり続けているとも言われます。

ライターが配信した「シベリアの永久凍土で子犬発見 1 万 8000 年氷漬け、被毛も完全な状態」というニュース (2019 年 12 月 4 日) には、まるで“眠っているかのような子犬”の写真が添えられていました。2018 年の夏にシベリア東部ヤクーツクの永久凍土から発見され、生後 2 カ月で死んだとみられる個体は、ほぼ完全な状態で見つかっていました。イヌかオオカミかは検査待ちだということですが、もしイヌなら、世界最古のイヌかもしれないということです。

ロシアの永久凍土は、近年急速に溶け出して、地中に埋まっている古代の動物が見つかることが多くなっているとのことです。日本とロシアの共同研究チームは 2018 年 7 月、約 3 万年前に生息していたという「ホラアナライオン」の非常に状態のよい赤ちゃんとおオオカミの頭骨を発見しています。

国連は 2015 年 9 月、「Sustainable Development Goals (持続可能な開発目標、SDGs)」を採択し、国連加盟 193 カ国が 2016 年から 2030 年の 15 年間で達成するための目標を掲げました。17 の大きな目標と、それらを達成するための具体的な 169 のターゲットで構成されています。その中で「13. 気候変動とその影響に立ち向かうため、緊急対策を取る」「14. 海洋と海洋資源を持続可能な開発に向けて保全し、持続可能な形で利用する」「15. 陸上生態系の保護、回復およ

び持続可能な利用の推進、森林の持続可能な管理、砂漠化への対処、土地劣化の阻止および逆転、ならびに生物多様性損失の阻止を図る」が謳われています。これらは特に国や地域を超えた認識・理解・協力が必要なものです。人間・自然・環境・社会・経済などが「持続可能」であるために大変に重要な達成目標といえるでしょう。

ところで、2019 年の地球温暖化対策に消極的な国に贈られる「化石賞」には、日本、ブラジル、オーストラリアの 3 カ国が選ばれました。スペインで開催された国連の環境会議「COP25」に合わせて、国際 NGO (非政府組織) などが発表したものです。日本が選ばれたのは、梶山経産相が「石炭開発や化石燃料の発電所を選択肢として残しておきたい」と発言したことなどが理由でした。

教祖は「たんへとなに事にてもこのよふわ 神のからだやしやんしてみよ (三号 40, 135)」と教えられました。「このよふわ神のからだ」に現れていることの思案は、「持続可能な人間」であるための思案でもあるはずですが、それは人間にだけ都合のよいわけではないでしょう。

かつて、レイチェル・カーソンは、「自然は、沈黙した。うす気味悪い。鳥たちは、どこへ行ってしまったのか。みんな不思議に思い、不吉な予感におびえた」「春がきたが、沈黙の春だった。いつもだったら、コマドリ、スグロマネシツグミ、ハト、カケス、ミソサザイの鳴き声で春の夜はあける。そのほかいろんな鳥の鳴き声がひびきわたる。だが、いまはもの音一つしない。野原、森、沼地一みん黙りこくっている」(『沈黙の春』新潮文庫、1974) と綴りました。「神のからだ」からの声を“聞く”技術の必要を思います。新しい年を、希望の年にしたいと願います。